

博物館では、2004年10月12日から11月28日にかけて、特別展「京の文化人とその遺産―神田家の系譜と蔵書―」を開催しました。この特別展に際して、特別展記念講演会が催されました。

以下の講演録は、講演内容に一部補訂・加筆したものです。

特別展記念講演会講演録 (1)

京都の町衆と神田家

五 島 邦 治 (園田学園女子大学助教授)

東洋史の碩学で、古典籍の収集家としても知られる神田喜一郎博士の宅は、大谷大学とも至近の、現在の京都市上京区室町通今出川上ル築山北半町にあって、代々は両替商を営む有力な京都の町人の家柄であった。初代の喜左衛門(法名宗雲、貞享元年《1684》没)は、摂津国島下郡(現大阪府茨木市福井)の出身で、寛永年中(1624~44)に京都に出、この地で家業をはじめたという。出身の国名から屋号を津国屋といい、代々、東本願寺派長徳寺の有力な檀徒でもあった。

その九代目家寿の六男、神田信久(寿海、文久2年《1862》没)は、十一代久伯、十二代目の実子喜久を後見した神田家にとっては重要な人物で、現在残された神田家記録の多くはこの人の手になる。ところで、豊臣秀吉が天正19年(1591)に上京と下京の町に対して地子(地代)を免除した朱印状などの重要文書とともに、町外不出の秘本として上京親町筆頭の上立売親九町組に伝えられてきた『親町要用亀鑑録』と『上下京町々古書上立売明細記』(嘉永7年《1854》)という記録がある。京都の町の歴史を知るうえでの基本的な史料であるが、この筆者こそ先の神田信久であった。上京上立売組の長老であった信久が、丹念に京都の各町に残された文書を調査し、京都の町の由緒をまとめたものである。大谷大学に寄贈された神田家記録の中にも、『上古京立売親九町組年中行事要用録』(嘉永6年冬)、『上立売親町来由録』という表題の冊子がある。前者こそは『親町要用亀鑑録』

の元本ともいべきもので、町の求めに応じて写し与えた状況が、朱筆で奥に追記されている。後者は、同じく上立売親九町組に残った『上古京立売親九町組年中行事要用録』の元となった本と考えられる。その他、『古御触書抜留』(嘉永6年)は下京の惣町文書を書き留めたもので、この原文書が残らない現在、写本として貴重な存在になっている。神田家記録には、こうして京都の町の由緒に関する重要な記録が多数含まれているのである。

*

室町時代後期、もっぱら商工業に従事した京都の都市民は、祇園祭などの祭礼を軸として組織化を進め、民政・警察などにわたって、町の運営を自治的に行うようになる。これが「町衆」である。とくに16世紀中ごろには、室町幕府の將軍継承をめぐる政権の混乱や天文法華一揆による自治機運もあって、京都の町の組織化が進んだ。すなわち複数の町が集まっていくつかの組町を作り、さらにその組町が惣町を構成するのである。これを「町組」というが、京都の場合、そうした惣町(町組)として、上京と下京の二つがあり、当初はそれぞれ五つの組町で構成されていた。これがその後の京都の町組織の基礎になり、江戸時代を通じて町と町組を広げていったのである。当初からある町組の町を「古町」、その後市街部の発展とともにできた町を「新町」とよんで区別している。神田家であった築山町は、上京立売組に属する古町で

あった。

*

室町時代後期、上京が惣町として、武家に對抗したり、構成される町相互間の調整をしていたようすを、当時の公家の日記から知ることができる。

権大納言山科言継の日記『言継卿記』によると、天文16年(1547)正月11日、守護大名細川の有力な家来である上野玄蕃頭元治が、公家の一条家敷地内にある民家の地子(地代)につき、武力によって干渉しようとしたことがあった。一条家の急報によって、山科言継は家来に武装させてみずから駆けつけたのであるが、その場には多くの公家や武家奉公人とともに「上京中地下之輩」が集まっており、全面的に一条家を支援することを表明したという。この「上京中地下之輩」とは上京の町連合体である惣町にほかならなかった。

また、天文19年(1550)7月15日には、同じ上京内にあった一条殿門前の町と誓願寺門前の町の二つの町が喧嘩を起し、死者まで出した。翌日「上京中」百二十町として両町を仲裁したという。上京の共同体が連合して、その構成される町同士の喧嘩を収めたのであろう。

こうして室町時代以来、上京の惣町は、時には武力を以て、強い意志力で町の自治を運営してきた。神田家の属した立売組も、その組中の築山町も、そうした自治を指導してきた町としての誇りをもっていた。代々の神田家当主はその町の長老の後裔であり、先の信久の『親町要用龜鑑録』には、自治を運営してきた町衆の自負が表明されている。

*

「町衆」は、また公家と交流をもち、文化的な活動をしている。それが有力町衆のステータスでもあった。上京小川に居住した筆作の木内弥二郎を例にその実態をみてみよう。

同じ『言継卿記』天文3年(1534)8月2日条によると、山科言継は寿命院という僧から借用した『伊勢物語肖聞抄』という書物を「小川之筆作弥二郎」を通して返却している。この「弥二郎」は木内弥二郎といい、小川で「筆作」の商売をした町人であったが、同時に「狂言者也」とも言われるように、ほとんどプロ化した町衆の中の狂言役者のひとりで、内裏や公家の邸宅で能の狂言を演じたらしい。たんに演じただけではない。天文13年(1544)正月には、内裏で天皇御覧の猿楽能(当然狂言はその中の1パートを担う)を行うにあたって、これもまた当時もてはやされた町衆猿楽役者の渋谷を呼ぶことになり、言継はその斡旋をこの弥二郎に命じた。また、同年の11月には、木内弥二郎が山科言継邸を訪れ、豊後国へ渋谷を同道して下向するにあたって、かの国の戦国大名である大友への紹介状を書いてもらっている。これは、九州で渋谷の能興行を行うための手づるを求めたのであろう。木内弥二郎は、みずから狂言を演ずるかたわら、能興行の仲介や世話をするプロデューサーのような役割を果たしていたのである。

これより前、延徳3年(1491)4月23日には、相国寺の万松軒に「小河手猿楽大夫」(手猿楽は素人猿楽の意味)が参入したこともある(『実隆公記』)。応仁の乱以後、京中のこうした町衆中に組織された猿楽集団が、内裏や公家邸に競って猿楽を演ずることが流行したのである。木内弥二郎といい、「小河手猿楽大夫」といい、上京の小川周辺にはそうした経済力をもちながら教養人を標榜する都市民が居住していた。

神田家の代々が漢籍や古典に関心をもち、その古書を収集した背景には、代々門徒であった東本願寺の伝奏家(朝廷に取り次ぐ特定の公家)である、勸修寺家の影響があったといわれている。京都の町衆の家屋は、豊臣秀吉の地子免除までは、公家の所領の上に

建ち、住人である町衆は、地子を公家に納めていた。つまり農民と同様に、領主があって、本所と仰いでいたのである。それはたんに領主と領民の関係以上に、親密な関係をもっていた。

現在の上京区新町通今出川下流に徳大寺殿町という町がある。室町時代には公家の徳大寺の邸宅があったことにちなむ町名である。『言継卿記』にも、山科言継がここにあった徳大寺邸を訪ねた記事があり、絵師の狩野元信に引き合わされている。そのとき、元信は徳大寺邸の裏に居住していたという記述もある。現在、徳大寺殿町の北寄りに、新町通の西側を通る小川通へと貫通する細い道がある。京都ではこうした細い道を「^{ずし}図子」とよんでいるが、この図子は「狩野図子」とか「元図子」という名がついており、前者は狩

野元信の邸宅地という由緒によるものであって、『言継卿記』の記事とも符合している。江戸時代になって、徳大寺の邸宅そのものは、この徳大寺殿町から内裏の側に引っ越し、さらに明治以降は東京に引き移ったのであるが、少なくとも最近まで、町内の人たちが毎年徳大寺殿の墓地のある鴨東の真如堂に参拝するのを例としていた。江戸時代になって公家が領主でなくなっても、町の由緒として公家との関係はつづき、町衆は公家をたいせつに扱って、習慣を残してきたのである。

京都の町衆の文化的な活動は、こうした公家との交流の中で育ち、伝統を維持してきたのである。神田家の文化的な活動も、このような町衆の伝統的な系譜中で考えられると思う。



大谷大学博物館 2004年度特別展

神田家の系譜と蔵書

京の文化人と
その遺産

2004年10月12日(火)~11月28日(日)

場 所：大谷大学博物館(大谷大学 豊流館1F)

開館時間：午前10時~午後5時(入館は午後4時30分まで)
※休館日の毎週金曜日は午後7時まで閉館(入館は午後6時30分まで)

休 館 日：日・月曜日、11月19・20日
(但し、11月28日(日)は開館)

観 覧 料：300円(一般 大学生) 200円(小中学生)

記念講演会

■第1回 「神田コレクションの魅力」
講師：藤田孝典 氏 (大谷大学名誉教授)
日時：10月18日(土) 午後1時30分~
会場：大谷大学メディアホール (大谷大学豊流館3F)

■第2回 「京都の町衆と神田家」
講師：石黒明彦 氏 (関西学院大学名誉教授)
日時：10月30日(土) 午後1時30分~
会場：大谷大学メディアホール (大谷大学豊流館3F)

大谷大学